（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	魚住耕司
論文題目	カメルーン農村における住民のキャッサバ改良品種の受容		

（論文内容の要旨）

本論文は、開発プロジェクトで導入されたキャッサバ改良品種を、地域住民がどのように受容しているのか、受容が進んでいないとすればその要因は何なのかを、カメルーンの一農村の事例から明らかにしたものである。

序章では、キャッサバや改良品種に関する先行研究、開発プロジェクトと地域住民との関係に関する先行研究を論じ、本論の目的を述べた。また、調査地に長期滞在しながら、食事調査、家計調査、価格調査、味覚調査、畑の測量など複数の調査によって、多角的にデータを収集したことを述べた。

第1章では、調査地の概要とその地で実施された開発プロジェクトについて説明した。調査地では、リネージ（親族集団）間の根深い対立があることや、多くの開発プロジェクトが繰り返し実施されてきたことを指摘した。また、2011～2016年まで日本とカメルーンの研究者により実施された「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理:地球規模課題と地域住民ニーズとの結合（FOSAS: Forest-Savanna Sustainability）」プロジェクトでは、キャッサバ改良品種の普及とキャッサバのイモの加工が促進されてきたことを述べた。

第2章では、住民組織に着目し、キャッサバの加工事業について論じた。調査地には相互扶助・宗教・農業などの住民組織が多数あるが、相互扶助の住民組織では会員のリネージに偏りがあることを述べた。また、開発プロジェクトではキャッサバ加工事業が住民組織を通じて行なわれてきたが、利益の不公正な分配が原因で活動が停滞していることや、個人による加工事業においては多くのリネージの住民が恩恵を受けているものの、買取価格の問題などがあることを論じた。

第3章では、キャッサバのイモ・葉とその加工品の消費・販売状況、キャッサバの品種に対する住民の認識と使い分け、改良品種の販売面での課題について論じた。キャッサバの加工品は住民の生活に欠かせないが、消費・販売量は世帯によって差があること、住民がキャッサバの品種によって異なる嗜好をもち、その特徴に応じて消費・加工・販売において使い分けていること、苦くて筋の多い改良品種は好まれず販売が難しいため在来品種と混ぜて売り、結果、村のキャッサバ全体の評判が低下していることなどについて述べた。

第4章では、畑でのキャッサバ改良品種の栽培状況について論じ、住民がプロジェクトでその茎を受け取っていながら放棄・除去した理由を分析した。キャッサバの栽培

では、畑の場所と植え方という2つの問題があり、自宅から畑までの距離、畑で働くことができる女性の有無、品種に対する認識などの要因により、プロジェクトで分配されたキャッサバ改良品種の茎が放棄・除去されたことを述べた。

終章では、プロジェクトが一部住民に独占され加工業が停滞し（2章）、キャッサバ改良品種の特徴を住民がいかしきれておらず（3章）、畑の場所や働き手の問題から改良品種の茎が放棄されている（4章）といった現状を踏まえ、開発プロジェクトの課題について論じた。調査地においては、開発プロジェクト側の地域への理解の欠如と、地域住民側のキャッサバ改良品種への理解の欠如という問題があり、プロジェクト側が期待したようには受容されていなかった。開発側が地域の人間関係に配慮し、一部の住民だけが裨益することにならないようプロジェクトを運営する必要性や、住民に改良品種の特徴を良く説明し、それを生かした栽培・加工・販売を住民と一緒に試行錯誤することの重要性を提言した。また、村全体を代表する組織がない場合、個人単位で参加できる仕組みをつくる必要性を指摘し、開発と地域住民との関係のあり方について議論した。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、カメルーン共和国南部の農村において、開発プロジェクトで導入されたキャッサバ改良品種を地域住民がどのように受容しているのか、また受容が進んでいないとすればそれはなぜかを、長期のフィールドワークで得た詳細なデータから多角的に迫った力作である。

本論文の優れた学術的貢献は、下記の3点にまとめられる。

一つ目は、複数の調査を組み合わせた研究手法である。魚住氏は、キャッサバ改良品種の受容の実態とその受容を左右する要因を明らかにするため、畑や水道施設の測量調査、延べ300人以上の住民への改良品種に関する聞き取り調査、古老への地域の歴史に関する聞き取り調査、12世帯への食事調査、5世帯への家計調査、複数の市場におけるキャッサバの価格調査、22人の住民に対するキャッサバの嗜好調査、住民のキャッサバ販売の同行調査、加工場や住民組織の集会における参与観察など、多くの調査を組み合わせている。キャッサバという一つの作物と一つの農村に焦点を当てたこれら綿密な調査により、開発プロジェクトの抱える問題点、地域の特異な歴史、農民の作物選択の基準、キャッサバ販売や加工の実態などが詳細に明らかにされた。

二つ目は、開発プロジェクトが地域に与える影響について、住民にもっとも近いところから情報を得ている点である。魚住氏は、合計約1年8か月の現地調査において、住民から「開発プロジェクトの一員」とみなされていた。住民の家にホームステイをし、住民にもっとも近いプロジェクト関係者であった魚住氏には、プロジェクトへの率直な不満や現状報告が多々寄せられた。開発プロジェクトの利益が一部の親族に独占されていること、改良品種の茎がひそかに外部へ販売されたり廃棄されたりしていることなどは、現地の複雑な人間関係に巻き込まれながらも、開発側と住民側の境界に立つことで得られた貴重な情報といえる。この結果、開発プロジェクトが地域住民に一つの資源としてとらえられ、それを独占しようとする住民同士の対立や葛藤がある一方、開発慣れした住民はそのような状況を諦め、受入れていることが明らかにされた。

三つ目は、二つ目とも関連するが、地域の人間関係に取り込まれながら調査を行ったことで、開発プロジェクトが地域に受け入れられるための具体的な提言がなされている点である。開発プロジェクト側は壮大な計画を語り住民に夢を与えたが、プロジェクトが進むにつれ、住民はその期待をしぼませた。開発プロジェクト側もまた、住民がうまくプロジェクトを活用しない状況にいら立ちをみせていた。多様なデータから双方のすれ違いを克明に描いた魚住氏は、開発プロジェクト側が地域住民と議論を重ね、彼らの要望を聞き、一緒に試行錯誤することの重要性を主張する。また、地域の複雑な人間関係に配慮することや、地域の誰にでも平等に開かれたプロジェクトにするため、日本の公民館方式の施設利用を提案するなど具体的な方策をあげている。加えて、改良品種の

特徴を生かした加工品を手がけ販売にいそしむ者もいることから、住民に改良品種の特徴が理解されれば普及の余地も大いにあることを指摘している。このように本研究は、キャッサバ改良品種の受容の困難だけでなく、普及の可能性についても例証している優れた地域研究である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年11月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。